

げきもうしゅう

撃蒙抄 (重要文化財)

二条良基著 貞治5年(1366)写 一冊

伝頼阿筆

縦 22.7 cm 横 15.5 cm

連歌は「座の文芸」と称される。それは、複数の人が寄り集まって、上の句（五・七・五）に別の人が下の句（七・七）を付け、それを交互に

唱和することによる。百句連ねる「百韻」が基本。百韻十卷で「千句」になる。

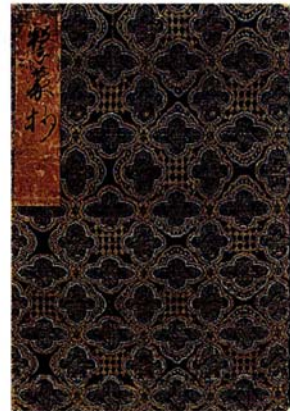
連歌は、鎌倉時代に生まれ次第に形を整えながら、南北朝時代には和歌の勅撰集に準ずる連歌作品集『菟玖波集』を編纂するまでになる。これは連歌が和歌と同等の位置に立つ文学にまで高められたことを示すものである。

連歌を詠むことが貴族や武士達の大切な教養になってく

ると、その作法を教える式目書の需要が多くなる。

『擊蒙抄』は、南北朝時代を代表する文化人の一人で、『菟玖波集』の編者でもある二条良基が、初心者向けに著した連歌の作法書である。

延文三年（一三五八）七月、後光厳天皇の勅命により筆を起こし、献上した。巻頭にその作法について、「一、初学の習べき体 ことばすくなく、寄合おほからず、するくといひなして、めづらしき風情、き、なれぬことを好べからず。一言をもて句をなすをよしとすべし」と記し、以下十四項目に例句一七〇を示して解説



し、実作上の心得を述べている。ただし、例句の大半は救済の作品である。

本書は、成立より八年後の貞治五年（一三六六）の書写。本文は頼阿筆、外題は青蓮院尊朝親王の筆と伝えられる。大阪府堺市「開口神社」旧蔵の現存最古写本、平成三年重要文化財に指定されている。

（天理図書館 牛見正和）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
 平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）  
 ただし12月23、24、27～31日は休み  
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）